

話題の講義ライブ  
LIVE 2012

Today's Program 国際開発論A

# TSUDA COLLEGE 津田塾大学



学芸学部 国際関係学科

5.15.Tue. at Kodaira

13:00~14:30

丸山 淳子 講師



## 若者よ、大いに悩め! 「既存の見方」のその先へ

講義の流れ 「開発」に関わる考え方やパラダイムの変遷、諸アクターの特徴について説明する。  
醍醐味 自分のステレオタイプな見方を振り返り、多様な角度から物事を考えられるようになる。

### 国際開発に「人類学」が有効とされる理由

教室というよりちよとした小ホール。巨大スクリーンを背にステージ上でマイクを握るのは丸山淳子先生だ。自らの体験を踏まえた説得力ある講義が評判。「前回は国際開発の理論的背景の変遷を説明しました。それについて皆さんの感想を提出してもらいましたが、望ましい方向に向かっている」というスッキリとした意見はほとんど見当たりませんでした。知れば知るほど何が正しいかわからなくなったり、条件つきで望ましいとしたり、あるいは望ましくないという意見だったり……。私はとても良いことだと思つています。午後の穏やかな空気を打ち破る一言。学生たちの表情が変わった。

さて、今日のテーマは「開発と人類学」についてである。人類学は国際開発を効果的に行う手段として1970年代後半から急激に注目されるようになった。

まずは両者の接点から。最も興味深かったのは、「社会開発への移行」「社会への貢献重視」という対になる言葉である。1960年代の国際開発はひたすら産業化を目指し、マクロな視点で進められた。しかし、近代化一直線では途上国が自ら努力するのを妨げたり、取り残される弱者をどうするかといった問題が生じた。そこで、「社会II人々の生活のあらゆる側面」を対象に進められるようになったのだという。丸山先生曰く、「開発の側の要請だけではなく、人類学のほうでも社会貢献が重要だ」という考え方が強くなつていたので、両者に歩み寄りが生じた。

### 目からウロコの見解 概念自体に問題あり!?

接点もあれば対立点もある。決定的なのは、開発はあくまでも便利な生活への「変化」を目的とするが、人類学はその土地の固有文化に関心を寄せ、むしろ「開発の影響がないところ」を調査の対象とするところから始まった。「これを研究者・ファウガソンは『呪われた双子』と表現しました。『開発』と『人類学』は対立しながら成長してきたんです。興味深い話は続く。さらに、「開発」という概念自体が問題なのではないか」ということも指摘されているのである。

「『』は頭をよわわわわわとして聞いてくださいね。」そう言つて、丸山先生が

説明したのは次のようなことだ。もともとは良いも悪いもないものが、科学やデータにより「先進国に比べてこんなに貧しいんですよ」と客観化されることで、「問題」として立ち現われてくる。また、途上国の人々の間にも「問題だ」という認識が浸透していく。

「それぞれの多様な歴史と生活様式を、途上国に『低開発』というステレオタイプに押し込めてしまつていのではないかと、ということをお私たちがもつと考える必要があるのかもしれない。目からウロコの見解にうなずく学生もいれば、問題の根深さに考え込む学生もいた。

### 便利な生活と引き換えに 立ち現われた新たな問題

最後は、具体的な事例としてアフリカのボツワナにおける開発計画が紹介された。1970年代からそこで暮らすサンという狩猟民族に対して、住宅・学校・病院・井戸・道路などのインフラを整備した拠点を作つて移住させる、という支援を行ったという。現在は64か所の開発拠点があり、ボツワナのサン全体の8割9割の人々が定住するようになってい

境荒廃といった問題も。じゃあ、開発を止めればいいのであろうか。住民が近代化を望んでいる場合もある。

「開発問題は多くの私たちの思考が絡み合い、一筋縄ではいきません。だからこそ問題から目をそらさず、とことん考え、悩み抜くことが大切だと思つています」

大いに悩む。それは「この考えを打ち崩し、さまざまな見方を可能にするに他ならない。淡々とした語り口調なのに飽きることはない。隅々まで計算された講義はあつと、いつの間にか時間が過ぎた。



## VOICES 学生の声 of University Students



有賀 友希さん (中央)  
英文学科4年  
国際協力は形だけでなく、「支援する・される」という根本的な関係を見直す必要があると感じています。ゼミでは日中関係における「パンダ外交」に取り組んでいます。自分の興味を徹底的に追求できる大学の学びはおもしろいし、やりがいがあります。

前田 智帆さん (左)  
国際関係学科3年  
丸山先生はご自身の体験をベースに意見やアドバイスをくださるのでリアリティがあります。私個人は日本の塾教育に興味があり、将来は世界でそのメソッドを伝えるような仕事をしたいと考えています。

小林 奈美子さん (右)  
国際関係学科4年  
丸山ゼミに所属して「教育支援におけるアート教育の役割」について研究しています。卒業後は大学院で自分の興味をさらに掘り下げたい。津田は先生との距離が近く、質問もしやすいし、自然と親しくなれるので、学問するのに最適な環境です。

## 津田塾大学

資料の請求およびお問い合わせ先  
URL <http://www.tsuda.ac.jp/> (PC) <http://posh.jp/tsuda> (携帯)  
TEL:042-342-5120  
〒187-8577 東京都小平市津田町2-1-1 津田塾大学 企画広報課入試室

### 学芸学部

### 【沿革・歴史】

「男性と協力して対等に力を発揮できる自立した女性の育成」をめざす先駆的な私立の女子高等教育機関として、1900(明治33)年、津田梅子により女子英学塾が開校。1931(昭和6)年に現在の千代田区から小平市へ移転。1948(昭和23)年に津田塾大学となり、学芸学部英文学科を開設。その後、数学科、国際関係学科、情報科学科を増設。また、2003年「多文化・国際協力コース」、2006年「メディアスタディーズ・コース」を設置するなど時代の要請に応える新しい学問領域を拓き続けている。2010(平成22)年に創立110周年を迎えた。

### 【オープンキャンパス情報】

- 7月28日(土)  
10:00~15:00
- 8月11日(土)  
10:00~15:00
- 8月12日(日)  
10:00~15:00

※詳細は、大学ホームページをご覧ください。



まるやま じゅんこ  
丸山 淳子先生

筑波大学第二学群比較文化学類卒。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科5年一貫制博士課程修了。博士(地域研究、京都大学)。日本学術振興会特別研究員、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科助教を経て、現職。著書に「変化を生かすプッシュマン-開発政策と先住民運動のはざま」(2010年/世界思想社)がある。他、論文多数。